現代における禅建築
―養国寺本堂新築を通して―

鶴見大学仏教文化研究所　下室覚道
水澤工務店　栗原悠紀

はじめに

瑩山禅師の『坐禅用心記』には次のように記されている。

大仏事大造営。最雖為善事。専坐禅人。不可修之。(1)

大仏事や大造営は最善ではあるけれども、坐禅を専らにする人はこれを修してはならないという太祖禅師の戒めの言葉である。このお示しの「最も善事為り」ということを念頭に置きながら、筆者は東京都新宿区愛住町にある曹洞宗養国寺の本堂新築に取り組んだ。(2)

養国寺は先の大戦により本堂が焼失し、その後建てられた十畳三間の客殿を仮本堂として利用し法事・法要を営んでいる状況であった。そのような中で平成二三年に筆者が兼務住職を拝命し、第一の目標を本堂再建とした。有り難いことに先代住職が積み立てていた財産があり、その資金を基として本堂を再建することになった。

禅の教えを最も簡潔に言い表した言葉に「不立文字」「教外別伝」がある。禅の特徴として、文字によらずに、実践を重んじるということがいえよう。実践の中でも坐禅が最重要であり、冒頭の瑩山禅師の教えでは坐禅を専らにする人は建築などに関わってはならないという戒めを示したが、「最も善事」であることは認めておられると感じる。

本稿は、ささやかであるが、檀信徒の悲願であり、かつ、小生の「禅の実践」の一つとして本年（平成二五年）三月末に竣工した養国寺本堂の新築に関して、どのような考えに基づいて設計したかを記すものである。併せて、仏教文化としての禅建築に関する考察を行った。

論述にあたり、新築に携わった水澤工務店設計部の栗原悠紀氏(3)のご協力を得た。栗原悠紀氏には主に第五章の養国寺本堂の「個々のデザイン」に関して執筆していただいた。

一　横山秀哉氏によるコンクリート造寺院建築の分類

養国寺本堂はコンクリート打ちっ放しにした。理由は火災ということが一番に挙げられる。日本の多くの寺社建築は木造建築であり、木造建築の宿命として火災による焼失がある。金閣寺も能登の總持寺も火災によって一瞬にして失われた。養国寺も火災によって姿を消した。火災を回避したいということが第一にあった。

しかし、保守性の強い仏教界においては木造建築に拘り、コンクリート造寺院建築に対する拒否反応もある。横山秀哉氏は次のように述べている。

> このように本質からいえば寺院建築の近代化は必ずしもコンクリート造にかかわりがあるわけではないが、新しい酒は新しい革袋にともいわれるように、新時代のモニュメント的建築として、かつ地域社会の要望にも答えて、旧来の寺院形式から脱却するためにコンクリートという新しい材料と構造による近代的寺院建築の発展性に意義があるのではあるまいか[4]。

寺院建築の近代化、新時代のモニュメント的建築としてコンクリート造寺院建築は捉えられている。コンクリート造りは特に大都市においては周囲に高層ビルに囲まれている状況では、木造よりも違和感がないようにも思われる。

さて、コンクリート造の寺院建築の歴史を横山氏の記述によってみてみたい。

> 本格的なコンクリート造寺院としては、明治四五年四月の函館大火で焼失した東本願寺別院の再建に当たり、当初の木造計画に替えてコンクリート造とし、平面計画内部造作などはほとんど従来のままではあるが、躯体から屋根に至るまで木造日本建築の伝統様式の木割をほとんど踏襲して、これを鉄筋コンクリートをもって造り出しているわけである。[5]

明治の後半よりすでに、北海道の地においてコンクリート造りの寺院建築が始まったことになる。また、こうしたコンクリート造りの動きを進めたのが関東大震災である。

大正一二年九月の関東大震災を契機として、耐震火構造としてコンクリート造の注目が寺院建築にも及んだことは当然で、（後略）[6]

関東大震災によって多くの人命と家屋が失われた。寺院も例外ではない。そこで、耐火構造のあるコンクリート造が注目を受けるのである。しかしそこでも、

一面永い伝統と僧侶・檀家・信徒の郷愁からすれば日本建築的なものでなければ寺としてのイメージが出てこないとするのもまた一理あるところである。[7]

として、保守的な動きもあったとという。

横山秀哉氏は現代のコンクリート寺院をA伝統式、Bインド式、C近代型の三種類に分け、さらに細かく次のように便宜上分類している。[8]

A伝統式
- a木割型
- b簡略型
- c応用型

Bインド式
- d築地型
- e 西域型

C近代型
- fフラット型
- gゲーブル型
- hシェル型
- iビル型
- jアバン型

まず、Aの伝統式は、日本建築伝来の仏教寺院様式を継承しようとするものであるから、木割をふまえて、それを応用し、あるいは参酌し、創意したものも含まれる。伝統式はさらに三種に分けられる。

a木割型は、木造建築の木割を踏襲して造り出そうとする。保守性の強い宗教界には歓迎されている。例として、東京浅草寺、鶴見總持寺大祖堂などがある。[9]

b簡略型は、造形的に破綻の生じない限り構造施行に無理のないように意匠を簡略化したものである。ただし、巨大な屋根、深い軒の出、柱・虹梁・繰形などの概念を有している。例として、成田新勝寺大本堂、巣鴨高岩寺本堂などがある。[10]

c応用型は、簡略型からさらに一歩を進めてコンクリート造として合理的な構造様式で、その主要部分に仏教の伝統造形意匠を象徴的に適宜応用付加することにより、仏教的表現を試みる。例として、福井永平寺吉祥閣、

浅草永見寺本堂などがある。[11]

次の、Bのインド式は、仏教の誕生地であるインド方面の塼造や石造の意匠を摂取しているもので、概して重厚で様相が異端的である。屋根にドームや相輪をあげるものが多いのを特徴とする。このインド式に二種挙げている。

d築地型は、東京築地の西本願寺別院に見られるようなインド的色彩の強いもの。例として、築地西本願寺別院本堂、世田谷妙祐寺本堂などがある。[12]

e西域型は、築地型に比べて造形的にみてやや異端性が強く、まとまりにも欠く。例として、神戸西本願寺別院本堂、大阪下寺町心光寺本堂などがある。[13]

第三番目のCの近代型は、端的にコンクリート構造に即した設計であり、伝統式やインド式で重視された屋根部分を単純に扱っているのを特徴とする。最初の三種は屋根の構成に即して分類している。

fフラット型は、フラットルーフであるが、屋根の軒庇の出と仕上げ方、あるいは向拝の有無、屋上にあげて塔屋・相輪・宝珠の意匠などによりそれぞれ趣は異なる。近代式としてはフラット型が最もひろく行われている。例として、東京向丘真浄寺本堂、広島禅昌寺本堂などがある。[14]

gゲーブル型は、切り妻屋根であるが、勾配屋根は一般に緩勾配とされる。例として、東京浅草善照寺本堂、福岡久留米千栄寺本堂などがある。[15]

hシェル型は、貝殻のような屋根に特徴がある。例として、小田原成願寺、浅草天岳院本堂などがある。[16]

iビル型は、専ら機能的経済的に処理し、近代化を推し進めると、特別な宗教意匠をほどこさず、ほとんど一般の営業事務所ビルディングに等しい形態となる。例として、浅草厳念寺本堂、両国回向院本堂などがある。[17]

jアバン型は、初めから仏教的あるいは宗派的な制約や伝統的な様式などには一切束縛されないことを信条として、前衛芸術と同様に、造形的な合理性と個性美の表現のみを追求するタイプ。例として、新宿専念寺本堂、新宿太宗寺本堂などがある。[18]

以上、横山氏によるコンクリート造寺院建築の分類を見たが、養国寺本堂も伝統的な木造建築ではなくコンクリート打ち放しの造りにした。大きな理由は先に述べたように耐震、耐火のためである。さらにまた、打ち放し仕上げは、型枠を外した状態のままで仕上げとする。この仕上がり状態

は禅の境地を表現したものと捉えることもできる。柳田聖山氏は牆壁の譬えに関して次のように述べている。

> もともと、牆壁の譬えはすでに先に引く智度論の身念処の条に見える。それは、無情であり、無心なるものの譬えである。坐禅はつねに兀坐といい枯坐といわれるように、その境地が無生物に譬えられる。敦煌本二入四行論第十八段と三十七段の二カ所に「心、木石の如し」といっている。(19)

コンクリート打ち放しは、後に見るシトー会修道院の石積みによる禁欲的で無装飾な空間に共通する美学があり、そして、それは、禅の境地にも通底するように感じる。

二　文化の発信拠点としての禅寺

先に述べたように、養国寺本堂をコンクリート造にした理由を第一に火災を回避したいということがあった。また、東京など大都市においてはマンションなどの高層住宅に囲まれており、それはほとんどすべて鉄筋コンクリートである。こうした状況においては、山を背景とした伝統的な木造寺院建築は似つかわしくない。

さらにまた、コンクリート造りに「新時代のモニュメント的」意味があるというが、コンクリート造建築にした理由として、「文化としての禅」の考えのもと、伝統的な本堂ではなく、既成の考えを打ち破るようなデザインの本堂を考えた。

先の横山氏の分類でいえば、養国寺新本堂は「近代型ゲーブル型」にあてはまろうが、正面に斬新なファサードを設えたものを考えた。

本堂外観

というのも、禅が流入した鎌倉・室町時代においては、禅僧たちが中国文化をもたらし、日本文化に影響を与えた。すなわち、茶や俳諧や武道や建築に影響を与えたのである。１２世紀末以来、数多くの日本僧が入宋・入元し、さらに、１３世紀後半以降次々と渡来僧が来日した。竹貫元勝氏は次のように述べている。

> 禅宗の伝来は、禅宗そのものに付帯する文化的なものの移入となり、また禅僧は禅宗とともに中国の最新文化を伝えた。その文化は、やがて禅宗受容者が注目するところとなり、またその文化面を第一義と　し、宗教としての禅宗を第二義的にとらえる禅宗受容者も出現するようになる。日本文化史の上で、禅宗の影響があるとされるものや、禅僧の活躍によって発展した文化であるとされるものなど、禅宗との関わりのあることが指摘されるものがかなりある。建築史・庭園史・文学史・絵画史・書道史・茶道史・食物史・印刷史などにおいては、とくに顕著な禅宗との関わりや、禅の影響を見出すことができる。ところで、禅宗が日本に伝えられたとき、世人は禅僧の衣や禅寺の建物にまず驚嘆したのではなかろうか。(20)

禅宗が宗教としてのみならず､舶来文化として受容されたのである。特に、建築においては「禅宗様」「唐様」という形式として日本に定着している。

> 俊芿がつくった伽藍には、南宋の建築文化が色濃く反映されていると考えられる。それも「大唐諸寺並皆如此」といった表現から、南宋の特定の寺院をそのままに摸したものではなく、俊芿が目にすることができた、比較的一般的な形式だっただろう。多様な宋文化・宋建築を多数の入宋僧・来朝僧が伝え、そのなかの公約数的な形式、および日本人が取捨選択し、一部日本的に改変したものが、のちに禅宗様という形式として定着することになるとみられる。鎌倉時代初期は、まさに宋様式、すなわちのちの禅宗様の分子が移入されはじめた時期であり、その一典型が俊芿による泉涌寺と言えるだろう。(21)

また、原田正俊氏は次のように述べている。

> こうして形成された禅宗寺院という空間は、中国文化をふんだんに採り入れ、大陸文化が日本全体に発信される拠点でもあった。また日本

文化と大陸文化が交渉する場でもあった。[22]

禅宗寺院が建築様式に中国文化をふんだんに採り入れたと同時に、禅宗寺院が中国文化を発信する拠点になったと論じられている。日本人は禅を最新の文化として、また、エキゾチシズム (異国趣味) として受け取った面もあるのである。

この「文化としての禅」ということで、今回の本堂新築にあたって、従来からの禅宗様ということには反するが、新たな文化としての禅という意味を込めて、正面のファサードはキリスト教の教会風を考えた。

日本が文化を受け入れる一つの特徴として平田精耕氏は次のように述べている。

> したがって、種々の文化や思想が日本に受け入れられます。これが日本人の特色だと言えます。しかも受け入れた外来文化をちゃんと日本流に改める能力を持っています。多様な外来文化は日本の中で温められ育てられて、もっと立派なものになります。（中略）このように日本人はすべてを取り入れて、それを改良して出すという能力があるようですが、これも多即一の精神が日本人の心に働いているからでしょう。[23]

中国文化の影響を受けた鎌倉・室町などの禅文化があるならば、ヨーロッパの文化の影響を受けた禅文化があったとしてもよいのではないか。それが、仏教とは異なる宗教であっても…。平田氏は次のようにも述べている。

> 母親の如くすべてを愛し、受け入れる日本人は、今後ますます種々の外来的文化を受容し、それをもっと洗練させ、立派にして、逆に外国へ輸出し続けるでしょう。そして、そのような点にのみ日本が世界文化に寄与する道があります。[24]

さまざまなものを受け入れ、咀嚼し、さらに洗練させていく。もとのものより更に良いものと化して吐き出すのである。禅寺も洗練された最新の「文化の発信拠点」であったし、今日もそうでなくてはならないと思う。

三　キリスト教カソリック修道院と禅寺との類似性

①カソリックと禅との交流

先に、養国寺新本堂正面は、斬新なファサードを考え、それはキリスト教の教会をアレンジしたデザインを考え、その理由は、最新文化の発信拠点としての禅寺の発想によるものと述べた。それでは、なぜキリスト教会なのかといえば、キリスト教、就中、カソリック、特にシトー派と禅との類似が見出されるからでもある。

キリスト教と仏教との相違点として、「有神教（Theism）」と「無神教（Atheism）」、「啓示の宗教」と「悟りの宗教」などと分類されている。(25) しかし、類似点も多くある。特に修行の形態に関して、キリスト教の修道院と禅の修行道場とは大変類似する。

まず、修道院は、紀元前三〇〇年頃、エジプトの聖アントニウス（二五一―三五六）は荒野に住み隠遁生活に入り、また、パコミオス（二九〇年ころ―三四六）は供住生活の修道院を創設したことに始まる。その目的は、禁欲的・隠遁的理想をもって、キリストの精神を厳格に保持することにあった。特に、清貧（私有財産の放棄）、貞潔（独身生活）、服従（会の上長者への絶対的服従）の三つの原則的な徳目は各修道院に共通である。

> ロマネスク建築創造の推進力となったのは、修道院である。修道院は、清貧と貞潔と服従の誓いをたてた修道士が、集団生活を営み、労働と聖務に励みながらキリスト教的人格の完成をめざす場所である。(26)

修道生活はカトリック教会や東方正教会で行われるもので、プロテスタント諸教会ではほとんどみられない。修道院は男女別住であり、祈りと労働がその生活原理である。戒律の厳しい修道院では毎日の日課が克明に定められており、女子修道院では外部との交流を厳しく制限する禁入制をとるところも少なくない。

このような特別な修道施設である修道院が中世において至るところに建立された。

> 修道院は、中世におけるもっとも先進的な生産組織であり、かつ学問と芸術の中心であった。こうした修道院が、都市だけでなく、むしろ世俗を離れた原野や山地に、そして辺境の地にまで建てられた。一〇

世紀頃のヨーロッパには、かなりの規模の修道院が、すでに一二〇〇は存在したといわれている。[27]

この修道院に住み、特別な誓い（誓願）をたて、一定の戒律にのっとった生活を実践する者を修道士または修道女とよぶ。彼らは「安息」を求めるのである。

静かな場所で心身を休める「安息」という概念は、キリスト教徒にとって非常に重要なものとされている。それは騒音のない時間と空間というだけでなく、そこでその魂が、調和と幸福に満ちた安らかな状態にあることを意味している。[28]

世界中に存在する多くの修道院は、神との出会いを求める修道士たちに「安息」を提供するために建てられたという。

さて、こうしたキリスト教修道院における「祈りと清貧と労働」は、禅の修行道場における「坐禅、貧、作務」に対応するとされる。

峯岸正典師[29]は、禅宗の僧堂とカソリックの修道院を比較し、双方の根底に横たわる共通性を考察されている。

僧堂と修道院では、集団の中で個として自立しながら自己を献げる生き方が模索されるという点において共通するところが見られる。①僧堂では〈仏道に自己を献げる生き方〉が摸索され、②修道院では〈神に自己を献げる生き方〉が求められる。なぜなら③自己を献げて生きる生き方自体に意味があるとされているからである。つまり、僧堂や修道院は〈宗教的「共同体」として、自己の献身を通じて、そこで自己が宗教的に熟成するところ〉としてその存在が意義づけられると考えられる。[30]

また、禅とカトリックとの交流の一つとして「東西霊性交流」がある。この交流に関して峯岸師は互いの共感として三点指摘されている。

具体的には（一）本交流が一九七九年以来今日まで三十一年間も継続していること。（二）長い歳月の中で、この交流における経験が熟成され、形となって発露される事例があること。例えば河野太通老師（第一回本交流参加者）は、自坊において、規矩を緩やかにして個室を用意し、参加二十数年後に「修道のための共同体の理念」を

禅の立場から実践しようとしている。（三）相互に共感を表明していること。故鈴木格禅老師は修道院と修行道場の間に「非常に共通するものを感じ」、ノトケル・ヴォルフ師も、「日本の僧侶は（中略）あっという間に私たち修道士の心を掴んだのです」と述懐している。これらの事例から、本交流には強い共感が生じていたと言えよう。[31]

ただし、違和感ももちろんあったという。たとえば、「禅の僧侶が修行道場から戻ることや、典礼時におけるカトリック側の姿勢の善し悪し等」に相互に感じられたという。

次に、峯岸師はこれらの共感が生まれてくる基盤を五つ挙げている。

①早朝起床、坐禅・朝課・朝食。午前は作務・坐禅・勤行・昼食。午後は作務・坐禅・晩課・夕食。夜坐そして入眠という修行道場の一日と早朝起床・全体での祈り・個人の祈り・ミサ・朝食。労働・昼の祈り・昼食・小憩後労働・夕方の祈り・夕食・夜の祈り・入眠といった修道院のサイクルはよく似ている。「三時の勤行、四時の坐禅」という定めを持つ修行道場と「聖務日課」に規定される修道院ではきわめて似た時間意識とリズムにおいて一日が過ごされていると言えよう。②加えて生涯をかけての修行・修道を志すという共通性もある。③また、我を消すということは禅の修行の眼目であるが、修道士も自己を極端に主張してはならない。聖ベネディクト会則では「謙遜の実践」が「修道の全課程に欠かせない」ことが示されている（古田暁訳『聖ベネディクトの戒律』すえもりブックス、二〇〇〇年、六八頁註）。④集団での坐禅や祈りという宗教的行を務め、作務・労働をするという形態の中に、信仰対象や宗教共同体への自己帰入が希求されているのを見て取ることができる。⑤こうした希求は、諸々の宗教的行為において身体を通じて表現され、自らを小さなものとして、大いなるものに対して畏れと敬意を表す。[32]

この中で①の一日のサイクルに関しては、例えば、事項で述べるシトー会修道院における夏と冬の日課表（十二―十四世紀）は次のようである。[33]

夏至 (6 月 21 日～ 22 日)

起床	1:45
宵課	2:00 頃
合間	数分
賛課	3:10 頃
賛課終	3:45
合間	
一時課	4:00
集会	
手仕事	4:40 頃
仕事終	7:15
合間	
三時課	7:45
ミサ	8:00 頃
ミサ終	8:50 頃
神の読書	8:50
六時課	10:40
昼食	10:50
午睡	11:30
午睡終	1:45
九時課	2:00
飲物	2:15
仕事	2:30
仕事終	5:30
合間	
晩課	6:00
晩課終	6:45
夕食	6:45
合間	7:15
終課前読書	7:30
終課	7:50
就寝	8:00

冬至 (12 月 21 日～ 22 日)

起床	1:20
宵課	1:30 頃
宵課終	2:50
神の読書	
賛課	7:15 頃
合間	
一時課	8:00
ミサ	
ミサ終	9:10 頃
合間	数分
三時課	9:20
集会	9:30
仕事	9:55 頃
仕事終	11:10 頃
六時課	11:20
仕事	11:35
仕事終	11:50
九時課	1:20
昼食	1:35
食事後	2:15 頃
神の読書	
晩課	2:50
晩課終	3:30
合間	
飲物	3:40 頃
終課前読書	3:45
終課	3:55
就寝	4:05

起床が午前一時、就寝が夏八時、冬四時であり、その間は三時の食事と祈り、労働で占められている。禅の僧堂と類似していることが分かるが、むしろ現代の僧堂よりも厳しかったのかもしれない。

②シトー会について

修道士は誓願と会の規則にしたがって生活する人々であり、禁欲的な面が強いが、カトリック教会に属するシトー会は特に禁欲的であった。シトー会修道院の精神は森に囲まれた静寂の中で世俗社会から離れ、祈りと労働に没頭し、禁欲的な生活を営むことである。

まず、シトー会の歴史をみてみよう。シトー会は一〇九八年にロベール・ド・モレーム（一〇二七年――一一一一年）によって創設された。当時ブルゴーニュ地方で権勢を誇っていたクリュニー会の贅沢主義を批判し、清貧を旨とし、規則を厳格に守る会派であった。クリュニー会所属の修道院は、多くはフランスにあったが、ヨーロッパ中に一五〇〇あったといわれるが、必然、富が蓄積し、修道士達は肉体労働から離れて、ひたすら典礼にいそしみ、そして、修道院の建物はきらびやかに装飾された。これに対してシトー会は批判したのである。ロベール・ド・モレームはブルゴーニュ地方のディジョン近郊のシトーに新修道院を創設した。その目指すところは、「キリストの貧者」をモットーとし本来の姿の修道院に戻り、禁欲・黙想・清貧・難行苦行の修道生活を営むことを目的とした。かれら修道士たちの念願したことは『聖ベネディクトゥス会則』を文字通り厳格にに実践することにあった。

> ベネディクトゥスもまたその『会則』の第四八章で次のように述べた。「もし場所や貧窮のために修道士が収穫作業で自ら労働する必要があれば、それに不満をかこってはならない。なぜなら、われわれの教父や使徒たちがなしたように、自らの手による労働で生活する者こそ真の修道士である」しかし、こうした修道士の労働義務は修道院が大土地所有者といて富裕化するにつれて、また修道士が祭式や祈りや写字に多くの時間を当てるようになるにつれて、薄れていった。ところが、シトー派修道士たちは『聖ベネディクトゥス会則』に厳格に復帰することによって、修道士の労働義務をも再び強力に復興することになった。(34)

ところで、シトー会のシトーとはロベールがニュイ・サン・ジョルジュの東の葦の生い茂る荒地に小修道院をつくり、この葦にちなんでシトー派と呼ばれたのである。

> この修道院は最初は「新修道院」と呼ばれていたが、まもなく附近一帯に生えていた蘭のロマンス語 Cristels に因んでキステルキィウム（シトー）と名付けられることになった。(35)

その後、シトー会はクレルヴォーのベルナール（一〇九一一一五三）の

参加により大きな発展を遂げた。彼らは、「祈り、働け」の標語とおり、農業による自給自足の生活をしながら、禁欲的な修道に身を挺した。初期シトー会においてベルナールが果たした役割は大きい。

> シトー会の礎は、一〇九八年にモレームのロベールと彼に従う修道士たちが、ブルゴーニュ地方の荒野シトーの地で修道の原初の姿を取り戻そうと共同体をはじめた時に遡る。当時、隆盛をきわめていたクリュニー会の総本山では、西欧キリスト教世界最大の規模となる第三次教会堂（一〇八八――一三〇年）の建設が進んでいた。その途方もない出費を目の当たりに、クレルヴォーの聖ベルナール（一〇九〇年ごろ――一五三年）は「貧しい人々の飢えを救うべきお金が、金持ちの目を魅惑するために奢侈な装飾に使われる」（『ギヨームに宛てた弁明』）と、クリュニー会の壮麗な建築を痛烈に批判している。シトー会の建築は、こういう聖ベルナールの信条を石と光に置き換えたものと言ってもよい。そして禁欲と清貧の徹底は、典礼聖具（聖盃と聖体拝領用小管を除く）や調度に金銀の使用を禁じ、建築からは装飾をことごとく削り落としていった。(36)

ベルナールはクリュニー会の批判をし、より禁欲的に生きること、「キリストの貧者」をモットーとして生きることを目指した。修道士は共同生活であり、タイムスケジュールが厳格に決まっていた。

> シトー会修道院ではどこの地域であっても、一年間にわたり毎日のタイムスケジュールが定められており、行事、日程は、どこの地にあっても同一であった。シトー会修道士たちの時間の流れと空間は同じものでなければならなかった。修道院の中では修道士たちに知らせる数々の儀式や食事の時間などは鐘楼の鐘、及び天井からぶらさがったベルの音で知らせることとなっていた。(37)

また、厳しい規律を守りながら生活をしていた。白衣を用い、肉食を厳禁し、頻繁に断食を行ない、着衣のまま就寝したという。(38)

シトー会の服装の特徴として白い服がある。

> 「ベネディクトゥス会の黒い修道服」とは反対に、「シトー会修道士たちは染色のない粗末な羊毛で編んだ修道服」を身につけていたために

「白い修道士」と呼ばれていた。[39]

ベネディクト会の「黒い修道士」に対し、シトー会は「白い修道士」と呼ばれている。

さて、クリュニー会の贅沢を批判した厳格なシトー会も、何世紀も経つうちに次第に規律が緩み、１３世紀にはドイツの東方植民とも結びつき未開地の開墾に従事した。しかし、そのころから次第に俗化していった。

そのシトー会に改革運動を起こして初心に戻したのが、フランスのラ・トラップの修道院長であるランセとその弟子たちである。このトラップ系の厳律シトー会の修道院は男子のものをトラピスト修道院、女子のものをトラピスチーヌ修道院と呼び、日本では函館に設けられている。

衰退して托鉢修道会として形を変えていったが、このシトー会の労働倫理が後のヨーロッパの労働倫理、職業観に大変な影響を与えたという。今野国雄氏は次のように述べている。

> シトー修道会に代表される修道士のこの労働倫理とそれに基づく自己抑制こそは、マックス＝ウェーバーの言うように、合理的な生活態度の組織化された方式を発展させるものとして、後にピューリタニズムの実践生活にとっても決定的に重要な理想とされたものであるとすれば、西ヨーロッパにおける労働倫理や職業観の形成にとっても、彼ら修道士が果たした先駆的役割はまことに大きかったと言わなければならない。[40]

さて、こうした歴史、特徴を持つシトー会であるが、この禁欲的な態度は、教会建築にも表現されている。シトー会の教会はとても禁欲的なのである。

> 一一世紀にシトー会士たちが既存の修道院から、さらに厳格な清貧を求めて分離した一番の理由は、もはや既存の修道院では聖ベネディクトゥスの『会則』が守られていないということだった。新たな道を歩もうとするシトー会の独自性は、彼らが修道院を立てる場所にもあらわれていた。当時、一般的な修道院はイエスの言葉に忠実に、天に近く、目に見えて高い、山の上に建てられていた。聖書のなかに「あなた方は世の光である。山の上にある町は、隠れることができない」と書かれていたからである。だがシトー会士たちは逆に、目に見えない

奥地に隠れた。これもまたイエスの生き方、つまり「隠遁し、ただ神だけを探し求める道」にならった生き方だといえる。そしてシトー会士たちは修道院のすべてを、人里離れた谷間の川辺に建てた。さらにすべての建物に対して、同じ平面図と同じ内装が指示されていた。教会は塔なしで建てられ、装飾のある窓などもきびしく禁止されていた。(41)

人里を離れた森や荒れ地を求めるという態度は、如浄禅師より道元禅師が教えられた次の『宝慶記』の記述と相通ずるものがある。

10 和尚、或時召示曰。尓是雖後生、頗有古貌。直須居深山幽谷、長養仏祖聖胎。必至古徳之証拠也。于時道元、起而設拝和尚足下。和尚唱云。能礼所礼性空寂、感応道交難思議。于時和尚、広説西天東地仏祖之行履。于時道元感涙沾襟。(42)

両者とも、町から離れ深山幽谷に居を構えるべきであるという教えである。

また、修道院の建物からは一切の装飾を追放し、彫刻や壁画のない、厳格な石の建物を求めた。クリュニー会の華麗な美意識とは反対にシトー会は厳格で質素な美意識を表明したのである。

シトー会芸術のモデルとは、厳密にいえば「ベルナルドゥス様式」なのである。聖ベルナルドゥスは、豪華な装飾やものの姿をかたどったモチーフを拒否し、シトー会の建築物はあくまでも簡素なものでなければならないと主張した。過剰な装飾は、修道士たちの気を散らすため、修道院にはふさわしくないと考えたからである。人里離れた場所で生活する隠者たちの姿がその根底にあるこの考えを、一一五二年、一二〇二年、一二五七年に、総会は成文化した。まずは、彩色された木製の十字架をのぞき、典礼用の豪華な装飾、彫刻、絵画が禁じられた。次に、写本の飾り文字は単色で、ステンドグラスには色をつけないものとされた。最後に、鐘楼、壁画、敷物、舗装に関する一連の決まりごとが定められた。(43)

シトー会修道院は一切の装飾や彫刻を排した建築を求めた。また、彫刻や美術による教示を禁止したのである。

シトー会における生活と精神性は、自分の私利私欲をもたない一種独特の生活環境を必要とし、余分なものは価値あるものを見えなくして

しまうという節度にあった。[44]

「余分なものは価値あるものを見えなくしてしまう」ということ、これは禅にも共通すると思われる。このような理念のもと装飾を極力排除し、シンプルな建物が建てられたのである。

③ロマネスク様式のシトー会修道院

次に、シトー会の有名な修道院をいくつか見てみよう。シトー会の修道院の建築工法の基本はロマネスク様式といわれる。この名前の由来は次のようである。

> １９世紀初頭になって、これもフランスの考古学者シャルル・デュエリシエ・ド・ジェルヴィルが、中世前半の重々しい感じの建築のことをフランス語で「ロマン（roman）」と形容しました。１８１８年のことです。「古代ローマ風」という意味で、これが英語に入って「ロマネスク（Romanesque）」となったのはその翌年です。ド・ジェルヴィルはロマネスクに「古代ローマの建築様式から派生して、やがて地方色がつき、堕落した粗野な様式」という意味あいを込めています。[45]

ロマネスクの次にゴシックが起こるが、ロマネスクとゴシックの時代区分は一般的には、十一世紀から十二世紀中頃ないし後半までをロマネスク、十二世紀中頃ないし後半から十五から十六世紀までをゴシックとするのが定説」となっている。六田知弘氏は次のように述べている。

> これ（ロマネスク）は史上最初の「汎ヨーロッパ的」な美術である。つまり建築にせよ、彫刻にせよ、絵画にせよ、ほぼヨーロッパ全域にひろまった中世最初の美術であったのだ。[46]

ロマネスクは建築のみならず、彫刻、絵画などにも見出される「汎ヨーロッパ的」な美術であるという。そして、ロマネスク美術はすべてに共通する雰囲気が見出されるという。

> というのもロマネスク美術すべてに共通する雰囲気、いや霊妙なるリズムを打つ音楽があるからである。これを明示的なルールで定式化することはできない。言葉や数式で簡単に表し得ない隠れた構造である。[47]

六田氏はその起こりを宗教運動に見出している。

こうした宗教運動を裏打ちする精神構造＝〈霊性〉は、ロマネスク美術を実現させた衝動と知性、すなわち〈美意識〉の背後にも控えているのではあるまいか。だからこそ、それぞれの建築家や画家たちが、そしてそれぞれの地域が、神を荘厳する自分たち固有の形を追い求め、おなじものが二つとないきわめて個性的な建物や彫刻・絵画が各地で造り出されたが、それにもかかわらず、すべてに共通する精神の息吹（「キリスト教世界」の息吹）がそこにはしみ通っているのである。(48)

さて、ロマネスクの特徴として、具体的に南欧中心に広まること、修道院建築に多いこと、石造天井が基本であること、半円アーチ、小さな窓、壁が厚いことなどであるが、感覚的には安定感があるといわれる。

ロマネスク建築の特徴として、ヴォリュームが加算的だと言われます。つまり、中心となる高く大きい部分により低く小さな部分が付け加えられ、そこにさらに低く小さな部分が加わる。そこには飛躍はまったくなく、見ている者にピラミッドのようなどっしりとした安心感を与えてくれます。この安定感は内部空間についても同じだと思います。ロマネスク建築の大地に根ざしたような感じは、このようなところから生まれているのでしょう。(49)

その後のロマネスク建築からゴシック建築へと続きますが、構造的発展は、ゴシックになると天井が異常に高くなり、高い尖塔アーチを多用するようになり、フライングバットレスのお陰で壁が薄くなり、開口部も大きく取れるようになった。また、ゴシック建築は個々のパーツが異様に細長かったりするが、ロマネスクはそのような事はせず、安定感があるという。

中世において、建築とは教会や修道院が中心ですが、ロマネスクの教会の最大の特徴は、暗くて重量感がある内部空間でしょう。分厚い壁に小さく穿たれた窓から差しこむ光線が、ひんやりとした床や壁の石材と戯れるさまは、なんとも神秘的です。（中略）暗いからこそ、そこに差し込むわずかな光が重要な意味を持つわけです。(50)

ロマネスク建築においては暗くて重量感のある内部空間を特徴とする。そして、小さな窓から差し込む光が重要であると指摘している。また、六田氏はロマネスクを定義するのは難しいという。

ではロマネスクの構造上の「特徴」は何だろうか。それは様式としてしっかりとした規範を備えているのだろうか。ヴォールト構造、半円アーチ、頑強な壁体とその有機的成長といった建築上の特徴が、幾何模様や怪獣・怪人の棲みついた柱頭、審判者キリストの彫られた半円形テュンパヌム部分などの彫刻の特徴とともに、すぐに思い浮かぶだろう。しかしロマネスクを定義するのは困難をきわめる。というのも上に挙げた特徴は、ロマネスク建築だけにあるのでも、すべてのロマネスク建築にあてはまるものでもないからだ。(51)

しかしながら、六田氏もそれ以前にない堅牢な造り、重厚な造りをロマネスクの特徴であると指摘している。

ヨーロッパを覆う「白いマント」、これこそ石造りのロマネスク建築ではないだろうか。大小の教会が、それまでの壊れやすい木造土壁や粗末な切石造りではなく、「神の家」の威光によりふさわしく、悪の力を寄せ付けぬ堅牢で雪白に輝く石造りの堂宇に造り直された。(52)

ロマネスク建築は簡素な飾り気のない堅牢な壁を主体にした造りであり、全体のバランスにも敏感であり、このようなシンプルさを重視する傾向は、現代の建築ともつながっている。

それでは、シトー会の宗規を反映した簡素・厳格な建築であるフォントネー修道院と「プロヴァンスの三姉妹」といわれる有名な修道院を見てみよう。

フォントネー修道院

シトー会修道院の中で最も古い建物の一つがフォントネー修道院である。現存するシトー会系修道院にあって、十二世紀の創建当時のままの修道院建築様式を留める数少ない施設である。東部ブルゴーニュ地方の森に位置するシトー会最古の修道院で、外観・内装とも華美な装飾性を一切排している。フォントネー修道院は一一一八年にクレルボーのベルナールによって設立され、一一四七年にローマ教皇エウゲニウス３世によって聖別された。一九八一年に世界遺産に登録されている。

いわゆる「ベルナール式平面」の代表例であり、現存するシトー会教

会堂の遺構のなかでは最古のものである。多くの研究者たちによって、聖ベルナールの建築美学を最も雄弁に語る建築として解釈されてきた。聖ベルナールがシトー会修道院全体に課そうとしていた反クリュニーの精神に特有な芸術表現であるといえる厳格なプロポーションをもつ革新的な建築とされる。(53)

ベルナールが直接建設に関与し、彼の指導のもと修道士達は、先に述べたように簡素なデザインを堅持しながら、その建築工法や石材の加工の精度、配置など、極めて高い技法を確立していた。聖堂には彫刻やステンドグラス、塔など、瞑想の妨げとなる装飾はほとんどない。

南フランスのプロヴァンス地方には、約八百年前に建立されたシトー会修道院が点在する。特に「ル・トロネ修道院」とそのシスターである「シルヴァカンヌ修道院」、「セナンク修道院」とをあわせて「プロヴァンスの三姉妹」と呼んでいる。この三つの修道院を簡単に紹介しよう。

ル・トロネ修道院

プロヴァンス地方ヴァール県の森の中にあるシトー会を代表する修道院である。現存する建物は一一六〇年から一二〇〇年頃にかけて建築されたものである。

教会堂は定石通りに東に向けて建てられ、側廊持つ幅の広い身廊部、袖廊祭室を持つ突出する交差廊、とやはり伝統的な平面計画を見せる。

しかしながら、身廊のベイの数が３つしかない、内陣東端が半円形の平面になっている、などの独特の特徴も同時に見せる。[54]

教会堂の全長４０．５m、全幅約１９．５mと規模は比較的ちいさい。

フォントネー修道院を造ったベルナールによって確立された建築規則を遵守し、石のみを建築材料として、人里離れた丘のふもとの傾斜地に建てられた。

堂全体の厳格な構成と全く装飾を排した建築の姿はまた、優れて聖ベルナールの理想の実現であるともいえる。[55]

また、極力装飾を排した石と光によるストイックな建築美は、現代の建築家を魅了し、新鮮な衝撃を与えつづけている。

例えば、近代建築の三大巨匠として有名なル・コルビュジェ（一八八七―一九六五）はラ・トゥーレット修道院の設計に際し、設計依頼主であるクチュリエ神父の指示によりこのル・トロネ修道院を訪れ、多大な影響を受けたことが知られる。

ラ・トゥーレット修道院は低予算の粗末な建物だ。一部を除いて仕上げは省かれ、あちこちで配管類がそのまま露出している。彼は、高価な材料に拠らずとも、空間配分や形態の妙によって至高の空間がつくれると信じていた。特にこの修道院については「比例、質、完成度が、極限にまで到達しえたとき、『えもいわれぬ空間』が現象する、その場が（譬喩ではなく）現実に光輝くのだ」と書き、それを「完成度の高さが生み出す衝撃」だとした。[56]

ル・トロネ修道院の建築において、建築監督の日記として創作された小説がフェルナンブイヨンの『粗い石―ル・トロネ修道院工事監督の日記―』である。その一説には次のように記されている。

地面から切り出した原石の塊りが寸法を合わされ、のみで彫られて、高貴な石材になるのだ。一見何でもない一打ち、一つの裂け目がことごとく力と忍耐の証人なのだ。私たちシトー会の修道士もまた、これらの石に似てはいないか。世からひき出され、宗規によって彫られ彫られ、私たちの顔を信仰に輝き、悪魔に対する戦いによって刻印されている…石のなかに入れ、自分自身聖なる司祭の建物となるために生

ける石となれ。[57]

この記述は道元禅師の『正法眼蔵随聞記』の一説を思い出させる。

玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。何の玉かはじめより光有。誰人か初心より利なる。必ずみがくべし。須練。自、卑下して、学道をゆるくする事なかれ。[58]

ル・トロネ修道院の特徴を六田知弘氏は次のようにいう。

ル・トロネ修道院は同じくシトー会のセナンク、シルヴァカーヌとともにプロヴァンスの三姉妹と呼ばれる。その中でももっとも寡黙にして高潔なこの修道院は、傾斜地（立地）と粗い石（建材）と装飾の排除（会則）という、「負」ともとれる条件から生まれた。シトー会の教会堂の西正面扉口には彫刻装飾がない。それは、クリュニー会の贅美さを痛烈に批判し、清貧を極限まで課したシトーの慣例規則が、建築から装飾を排除したからだ。ル・トロネも例外ではない。[59]

シルヴァカンヌ修道院

南フランスのラ・ロック・ダンテロン村のデュランス川のほとりにひっそりと建つ。教会堂は一二世紀から一三世紀に建設され、ロマネスク様式を基本とするが、一部初期ゴシック様式の構造も見られる。

「三姉妹」の内唯一シルヴァカンヌだけが、角形の小さな至聖所を持ち、両袖廊の東に各々２つの祭室が設けられ、「ベルナール式平面」となっている。ル・トロネと同じく側廊を伴った３つのベイからなる身廊を持つ。[60]

シルヴァカンヌ修道院はあらゆる装飾を排除するというシトー会の厳格

主義を徹底して守ったため、祭壇も半円ではなく直線的なデザインである。三姉妹の他の二つよりは装飾的であるという。

> シルヴァカンヌの教会堂はそろって厳格な簡素さを特徴とする三修道院のなかでは比較的装飾要素の多い建築である。特に西正面には、他の２教会堂にはない中央の扉があり、ヴッシュールで装飾されている。また、西正面の丸窓やその下の縦長の三連室は、いずれも、繰型が縁を豊かに飾り、bacini と呼ばれる彩色陶版がはめられるようになっていることが知られている。(61)

セナンク修道院

セナンク修道院は南フランスのゴルド村から北に五キロほどいったところの、人里から離れた山の間にひっそりと建っている。一一四八年に創設され、修道院の建設は、一一六〇年頃から十三世紀のはじめまでの５０年間ほど続いた。

セナンク修道院の特徴はその配置である。通常は祭壇は東向きであるが、セナンクだけは北向きである。

> 地形の影響を大きく受けたこの敷地の形状のため、教会堂としては例外的な配置がなされている。回廊は教会堂の西側に建つ。人の往来の困難な人里離れた寂寥の地というシトー会修道院が意図的に求めた環境は現在でもその面影を残し、修道院生活に不可欠な水を供給する川のほとりであるという点も典型的なシトー会修道院の立地条件である。(62)

地形の影響によって、通常とは異なる向き、配置になったが、そこまでし

て地形に拘ったことが分かる。シトー会の規則によれば、修道院は都市や村落に建ててはならない。人里から離れた、往来し難い場所に建てることが求められるという。これは道元禅師の教えと同じである。

不論賢・不肖、不択利・鈍機、須居深山幽谷也。(63)

賢者であっても不肖であっても、又、利根であっても、鈍根であっても、いずれでも必ず深山幽谷に住すべきことが示されている。

西田雅嗣氏は「プロヴァンスの三姉妹」の寸法・プロポーションを比較し、その相違点も指摘している。(64)

ところで、シトー会の修道院は、分厚い石に囲まれた暗い中に、わずかに差し込む光が重要である。

聖書はところどころで「神は光である」と言及している。教会堂建築にあっても、聖なる光は神の顕現である。その光をコントロールするのはまどの方向と高さ、大きさ、そして壁の厚さと角度だろう。(65)

天窓などから降り注ぐ光が重要である。例えば、阿弥陀如来は無量光仏とも言われるが、仏教においても光は重要な意味を有すると考える。因みに、養国寺の新本堂にも天窓を設けた。

以上見てきたように、キリスト教と禅との共通性ということで行き着いたところがシトー会の修道院ある。シトー会の禁欲的な厳しさと禅の厳しさに共通性があり、かつ、修道院と禅寺との建造物においてもシンプル性に共通点があると感じる。川辺哲雄氏はル・トロネ修道院などシトー派の修道院に見られる空間について、次のように指摘されている。

通常、我々のイメージする西洋建築・美術、壮大にして華麗であり、濃密な表現。こうしたものとはかけ離れている。その質素さ、簡潔さにもはや、文化的差異を感じることはない。それは、ヨーロッパ的という範疇を乗り越え、禅的ですらある。そこには建築空間の持つべき文化の様式、表現といったものはなく、宗教という存在すら感じさせない人間のつくり出す空間の、ある極点を導き出している。(66)

さらにまた、シトー会修道院と禅との共通な点は「自給自足」という点でも共通する。禅では四祖道信（五八〇―六五一）、五祖弘忍（六〇一―六七四）の師弟が現れ、湖北省を中心に布教に努めたが、これを一般的に「東山法門」というが、この時から集団生活による自給自足が始まったとされる。

東山法門の人々には、その生活において達摩や慧可とは全く異なる点があった。それは達摩や慧可が遊行生活を送ったのに対して、彼らは一箇所に定住したということである。(67)

これに対して、キリスト教側ではシトー会に至って自給自足が完成するという。饗庭孝夫氏は次のように述べている。

ところで修道院の自給自足の空間はシトー修道会に至って完成する。たとえば、ブルゴーニュ地方のフォントネー修道院は教会や回廊以外にパン焼きの炉、客人用拝礼所、規則に反した修道士を入れる牢獄をつくり、さらにさまざまな開墾、農業、牧畜、その他の作業を行う上での工房を持ち、教会の近くに墓地をもうける。その工房は水力のエネルギーをつかってさまざまな工作機具を発明し、あるいは改良して、彼ら修道士が行う諸々の労働の領域で、実験的かつ、先駆的な役割を果たしていたのであり、そこから中世経済の発展に間接的な寄与を成し遂げたものである。修道士の役割は、とりわけ「ロマネスク」の時代、「信仰」とともに多領域に根源的な革新をもたらした。(68)

四　大本山總持寺の先進性・進取性―客殿型法堂の発想―

大本山總持寺は今から百年前に能登から鶴見の地に御移転がなされ、今日見るような活況を呈することになった。

明治三一年（一八九八）四月一三日午後九時過ぎ、法堂付近から上がっ

た火の手はまたたく間に広がっていき、仏殿、紫雲臺、放光堂など、總持寺の主要な伽藍、諸堂を焼き尽くした。

再建運動の中、明治三二年、「總持寺東京移転建白書」が提出される。移転理由の概要は、

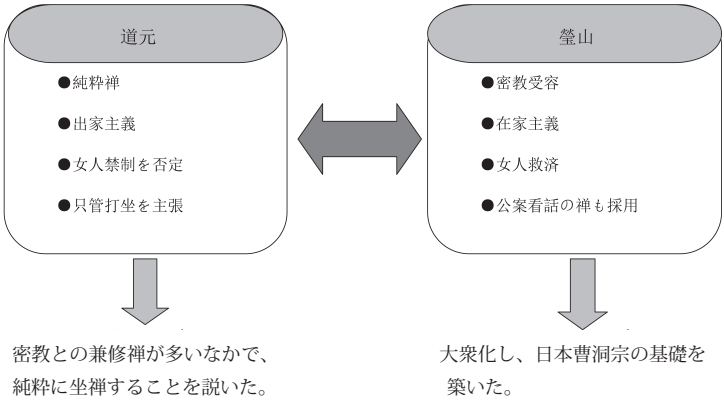
> 本山たる總持寺が北陸の地にあるのは時勢に適さず、全国の末寺や檀信徒の参詣に不便であり、経済面、布教伝道の面からも東京付近に移転することが望ましい。(69)

その後、日露戦争が明治三七年（一九〇四）勃発、移転の動きは一時停滞するが、明治三九年七月、總持寺貫首石川素堂禅師、永平寺貫首森田悟由禅師の名で「曹洞宗諮詢会」が開かれ、熟議の結果、總持寺の東京方面への移転が可決された。

能登總持寺の開創から数えて五九一年目の明治四四年（一九一一）一一月に遷祖式が行われ、大本山總持寺は正式に移転した。平成二三年（二〇一一）「大本山総持寺御移東百周年」の記念行事が種々執り行われたことは記憶に新しい。

曹洞宗の特徴として道元禅師と瑩山禅師の両祖、大本山永平寺と大本山総持寺の両大本山制がある。これは他の宗派には見られない制度である。瑩山禅師は道元禅師の三代後の方であり、同じ法系であり、法灯を有するが、それぞれに特徴があることが指摘されている。

中尾良信氏は次のような図により両者の特徴を示している。(70)



瑩山禅師について中村元氏は次のように述べている。

> 人類の思想の動きを見つめていると、瑩山禅師の出現ということ、また多勢の人々が禅師を讃仰したということは単なる偶然ではなくて、人類の思想の動きの中に位置づけることができると思われる。(71)

瑩山禅師の思想を思想史的に位置づけ、特に禅と西洋キリスト教と比較されている。

まず、中国禅宗の第三祖道信（五八〇―六五一）の禅僧の集団生活の確立を、エジプト人であるパコミウス（二九〇頃―三四六）が始めてキリスト教の修道院を確立したことに対比する。続いて、僧院の規範を記した清規を制定した百丈懐海（七四九―八一四）を中世修道院の生活規定の規則を確立したベネディクトゥス（四八〇頃―五四三）に対比する。さらに、ベネディクトゥスが、修行者はできるだけ世俗から遠ざかって生活せねばならないと考えてモンテ・カシノの高い山岳の上に修道院を造ったことを、道元禅師も俗塵から離れて山奥に永平寺を建立したことに対比している。

そして、瑩山禅師が祈祷的要素を取り入れ、民衆との接触を緊密にしたことを、修道院が「深山幽谷」のものから「町の人々」のものへと転化したヨーロッパのクリュニー修道院と対比している。

> ところがその後、東においても西においても変化が起きたのである。世の人々は、〈中世〉というと、その時期においては一様の調子をつづけていたと思うが、決してそうではない。長い中世の歴史には変化もあれば発展もある。その一つの現象として、修道院が〈深山幽谷〉のものから〈町の人々〉のものへと転化したのである。その転換をなしとげたのが、わが国では瑩山禅師であり、ヨーロッパはクリュニー（Cluny）の修道院であった。これは歴史的な大転換である。(72)

瑩山禅師の弟子である峨山禅師に関しては次のように述べている。

> 瑩山禅師の門下のうちでは、特に峨山禅師は禅密兼修的色彩を導入して寺門の興隆をはかった。また峨山禅師は、払拳棒喝のような禅機や、諸々の公案を重んじていた。(73)

中村氏はヨーロッパの修道院と禅宗とを比較され、クリュニー修道院に見られる大改革を、日本の瑩山禅師が成し遂げられたと述べている。(74)

曹洞宗として尊崇する両祖であるが、中尾氏、中村氏が指摘されているように、それぞれ特徴がある。それと同じく、両大本山にも大局的にみれば特徴が見いだされる。永平寺が保守的とすれば、總持寺は進歩的といえるだろう。先に見るように、大本山総持寺の進歩的・革新的な表れの一つが、明治時代の御移転といえよう。

現在の筆者はこうした、保守と革新の両者が必要であり、一宗の内に兼ね備えるべきだと考えている。曹洞宗という両祖、両本山を有する集団はある意味特殊であるが、その意義を考え、生かすべきであると考える。個人の心の中にも、相対する二者に対して葛藤を起こすことは多いと思う。苦しいがそれをバネにして向上していくのが道であると思う。(75)

深山幽谷か街にでるか、どちらが好ましいかと問えば人によってそれぞれであろう。この相対的な二者を提示し、それについて各人が考えることが重要であると思う。(76)

次に、大本山總持寺伽藍に見る革新性を見てみたい。曹洞宗の寺院で多く見られるいわゆる本堂を横井秀哉氏は「客殿型法堂」と呼んでいる。

> 特に曹洞宗では現在宋様式の土間の正規法堂は一棟もなく、いま法堂と称する建物はすべて臨済宗における方丈建築とその構成をほとんど同じくするものである。すなわち曹洞宗法堂は古来客殿とも呼ばれたところの建築であるから、これを正規法堂と区別して仮に客殿型法堂と名付けることとする。(77)

大本山を含めほとんどすべての曹洞宗寺院の法堂がこの形式を取っているが、その理由を横井氏は次のように述べている。

> 曹洞宗が、道元の遺風を伝えて権力に結びつくことなく、主として山間僻地に教線を張ったために寺院の経済力が乏しかったから、省略式伽藍様式を採らざるを得なかったことも一つの理由であろうが、能登總持寺における客殿制の普遍性も考えられる。すなわち、曹洞宗今日の隆昌の因を作った瑩山紹瑾による總持寺のその後の経営は、二祖峨山と五哲による山内の五院を根幹とする輪住制のもとに、その末寺門葉が固く団結して寺運の興隆を計った点にある。(78)

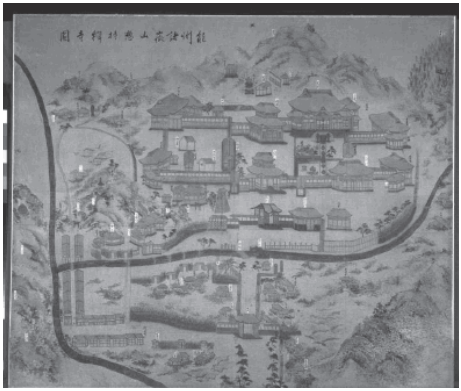
寺院の経済力が乏しかったために宋様式の正規の法堂ではなく客殿型法堂

が必要であったという理由の他に、今日見るような曹洞宗の隆昌の基を作った、瑩山禅師と峨山禅師と五哲による寺院経営によるものであるとする。すなわち、總持寺では客殿に開祖瑩山禅師と二祖峨山禅師像を安置して、「両祖常在常説法の道場との信念のもとに」客殿中心の宗教活動が活発に展開されたと論じられている。

そして、仏殿と法堂（客殿型）とが横に並立するという新伽藍配置さえ現れたという。現在の大本山總持寺の伽藍配置も仏殿と大祖堂とが並立している。

> このような能登總持寺の伽藍状況は年代不詳だが旧酒井家所蔵の恐らく總持寺お出入りの棟梁の手になるものと思われる竪横共七尺大の紙に描かれた古伽藍絵図面でも明瞭であり、さらに寛保三年建造の経蔵や元禄六年建造の伝統院の描写が現存遺構とは異なるところから、それ以前江戸初期にさかのぼるものかと思われる宝物館所蔵の古伽藍図でもその主要伽藍の配置は同様で、いわゆる宋様式禅宗七堂伽藍における前後する仏殿法堂が横に並立する点に總持寺伽藍配置上の特異性が見られる。(79)

この中の宝物館所蔵の古伽藍図とは下図である。



ここには法堂ではなく、「客殿」と書かれている。客殿型法堂である。

> 全国の地方寺院ではすべてが仏殿を建てることは困難であったから、中小の寺院では客殿型法堂に本尊仏を祀り、これを「本堂」あるいは「客殿」と呼び、さらに各地の中核寺院ではこの本堂を中心として左右前方に禅堂、衆寮、庫裡、東司、浴室をおき、回廊が諸堂を一巡する略

式の曹洞宗伽藍を構えており、近世の曹洞宗は禅門道場として独自の伽藍観をもっていたことが窺える。(80)

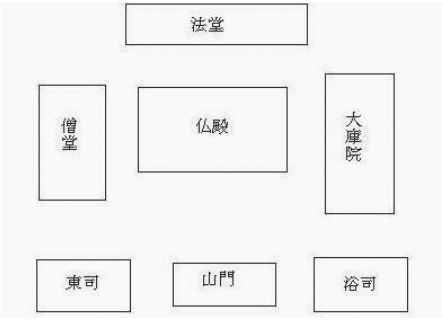
横山氏は總持寺の大祖堂も曹洞宗客殿型法堂に属するとして、次のように示している。

ただ總持寺法堂は古くから正面に開山瑩山禅師と二祖峨山禅師の像を安置して、瑩峨両祖常在常説法の堂として尊崇したところに意義が大きく、当初客殿とか法堂と呼ばれたものが祖堂的意義が次第に高揚され、もともとは形容詞であった大が名詞化し、近代に至って「大祖堂」となったものと思われる。(81)

横山氏は仏殿と法堂が並列する意義を次のように示している。

そこで筆者はこれを正規法堂と区別して客殿型法堂と名付けている。現在總持寺大祖堂が伽藍構成上からは全くこの客殿型法堂であることは明らかで、古く方丈とか客殿と記されていることは当然である。しかして總持寺において開創の縁由からこの大方丈こそ瑩峨両祖の常在常説法の道場であるとの信念がとられ、その意義からすれば両祖の尊像を安置して塔頭祖堂でもあった。かくて法堂であり、時に方丈・客殿であり、また祖堂でもあったわけで、これが「大祖堂」と呼ばれるようになったのは極く近世のことであると考えられるが、ここに仏殿・客殿型法堂並列の意義が認められる。(82)

そして、何故永平寺などに見られる伝統的な七堂伽藍配置に対して(下図)、總持寺式伽藍配置が生じた理由を次のように述べている。



七堂伽藍配置図

客殿型法堂の発想を總持寺に求め、それが大門派を通じて曹洞宗内に普遍したものと見られないであろうか。ともあれ、永平寺や大乗寺、永光寺でも開創当時はいずれも宋様式伝承の山門・仏殿・法堂（客殿）を中軸にして、その左右に僧堂・庫院・東司・浴室を配置するいわゆる禅宗七堂伽藍の制を踏襲したのに、新しく總持寺式伽藍配置を生ずるに至ったのは瑩祖の總持寺開創の趣意がその門徒により布衍され具体化した姿と見るべきであろう。(83)

先に述べたように、大本山總持寺の進歩的・革新的な流れからきた配置であることが分かる。その遠因を、徒弟院制の採用確立と輪住制によるものとする。

ともあれ曹洞宗における瑩祖が徒弟院制の採用確立と、その教化に法系門人の輪住制を組織づけたことは、臨済宗十方刹的叢林の如く山内の子院塔頭の発展をうながさず、寺院様式上には方丈客殿の祖堂法堂化を普遍させた一因と考えられ、特に總持寺式伽藍配置の発生に至った点に注目したい。(84)

また、横山氏は次のように推測されている。

總持寺法堂に早くから祖堂的意義が強かったからこそ、禅宗と並んで中世興隆の浄土宗や浄土真宗が本堂（阿弥陀堂）と開祖の御影堂、日蓮宗が本堂（釈迦堂或は法華堂）と祖師道とを横に同格に並立して伽藍の中心とされているのと規を同じくして總持寺法堂（大祖堂）が仏殿と並べられるに至ったものと考えられる。(85)

当時の浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などが本堂と開祖堂、祖師堂とを並列して配置されていた状況を取り入れたものと推測している。このことは一つの禅の日本的な展開といえよう。つまり、仏殿の後ろに住持が説法する法堂がある形式から、仏を祀る仏殿の隣に祖師を祀り道場としての法堂という形式が現れたのである。変遷というものはある意味必然であると感じる。

五　個々のデザイン

①内部の構造について

内部構造に入る前に、建物の縦長、横長に関して述べてみたい。イエズス会の宣教師ルイス・フロイス（一五三二―一五九二）は、ヨーロッパ人

と日本人との間の文化の相違や、さかさまの事柄について記録した。その中に「寺院、聖像およびその宗教の信仰に関すること」という一章があり、寺院建築や宗教について日欧の違いが記されている。そこに建物の縦長、横長の問題が記されている。

> われわれの教会は〔奥行が〕長くて〔間口が〕狭い。日本の寺院は〔間口が〕広くて〔奥行が〕短い。(86)

これに関連して、藤森照信氏は次のように述べている。

> かつて、南蛮時代、キリスト教会がはじめて東アジアに流入したとき、この地の布教の最高責任者だったいえイエズス会大巡察師ヴァリニアーノは、教会建築のあり方について〈ヴァリニアーノの建築規則〉というものを決めた。それまで、純ヨーロッパ式にすべきだ、（中略）その中でこれだけは絶対にしてはならないと戒めたのが、縦長、横長の一件で、〝横長は悪魔の形式〟とまで非難した。お寺をはじめとする東アジアの伝統的な宗教建築がことごとく横長であることを知り、また僧たちときつい宗教議論を重ねてきたヴァリニアーノの目に、仏教をはじめとするアジアの邪教と自分たちの聖なるキリスト今日の建築的なギリギリの差は、縦長・横長の一点にあると見えていたのである。(87)

ここで仏教寺院とキリスト教教会との差異が縦長・横長にあるとするが、しかし、仏教寺院すべてが横長というわけではない。例えば、タイのお寺は縦長であるという。藤森氏は次のように述べている。

> 仏教寺院の縦長、横長問題は、ベトナムとカンボジアの境で線が引かれ、それよりインド側は縦長、それより中国側は横長、となる。(88)

それでは、なぜ中国、韓国、日本の仏教寺院は横長なのであろうか。藤森氏は次のように答えている。

> 仏教寺院を含め、世界の宗教建築はことごとく縦長もしくは正方形になっているのに、どうして日本の場合、寺も神社も横長なのか。正確に言うと、どうして日本、中国、韓国、ベトナムの伝統的宗教建築は横長なのか。大ざっぱに言うと、中国の建築の影響を受けたところだけがなぜか横長になっている。(89)

中国建築の影響と捉えている。それではなぜ中国では横長なのか。

孔子廟、道観、宗廟の三つは、成立した時点から横長の建物となっていた。理由は明快で、祭られる対象が孔子も老子も先祖も実在の人間だからである。神の子キリストというような絶対的超越的な存在ではない。自分たちと基本的には同じ人間を祭るのだから、建物の形式は住宅でなければならない。孔子様も老子様も御先祖様も、死後生前同様に住宅に住んで、生きつづけてほしい。生きつづけるのだから、毎日、水も食事も差し上げます。　そういうようにして中国の宗教建築は住宅を基本とし、横長となったのだった。(90)

中国の宗教建築は人間を祭るためのものであり、キリスト教などのように絶対的超越的な存在に対してではない。それ故、住宅を基本としたために横長になったと説明している。

以上見てきたように、宗教建築には縦長、横長区別がある。養国寺は、縦長を採用した。これはシトー会修道院を模範としたためであるが、正方形に近い縦長である。

因みに、建物の向きに関しては、キリスト教会は、基本的に東向きに建築される。何故なら、「神は光である」という太陽信仰から、東から昇る朝日に向かって祈りを捧げるためである。オリエンテーションという言葉もこれに由来するという。しかし、仏教の本堂は通常南面して建てられる。養国寺本堂はこの点に関しては南面である。

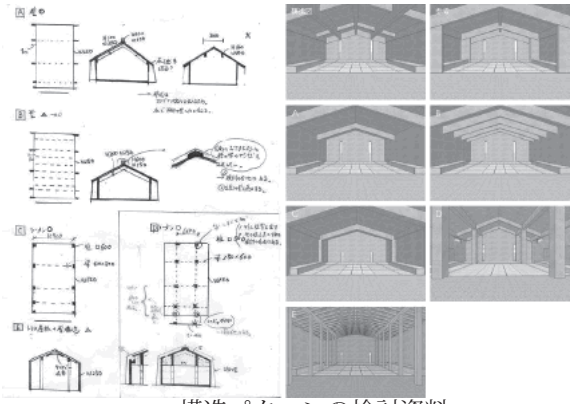
それでは、内部構造を見てみたい。下室住職（以下住職）の描いたスケッチプランや収集された教会建築の事例写真を参考としながら、教会建築をモチーフとした内部空間の意匠の検討を行った。

建築計画は、コストプランニングの中で優先事項を決め、実現していく事が大切である。本堂建築は、何世代にも渡る長期的な建物の使用が見込まれる。内部のしつらえや設備機器等のスパンは短く展開は可能であるが、構造体に関しては不変の造形を求める事となる。建築後の変更は容易ではない。

冒頭に記したように、今回の本堂新築計画では、近代的寺院建築の発展性、養国寺の敷地環境、またキリストと禅との共通性であるシトー派の寺院に見られる精神を表現するため、人の手で造形が育み出せる石、すなわち「コンクリート」をもって、構造体そのものが意匠となるような建物を

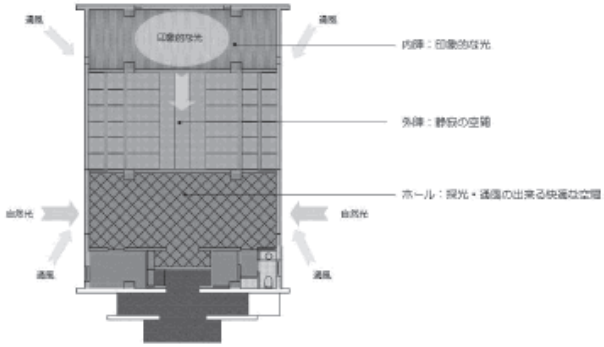
目指すところから計画が始まった。

まず、間口約 11 m、奥行約 18 mの必要とされる空間を切妻屋根の建築物として、どのような架構とするか、考えられる鉄筋コンクリート造の構造パターンの抽出から始めた。壁構造やラーメン構造等、柱・梁・壁の組み合わせで、架構モデルを比較検討した。



構造パターンの検討資料

住職のスケッチプランには、大きな一つの空間の中を、奥行き方向に並ぶ列柱が描かれた。列柱により空間を身廊や側廊へと分ける、言わば、教会建築のバシリカ型のイメージである事が読み取れ、イメージに近づけるように架構のデザインを検討していった。本堂の間取りは長手方向の奥か



ら内陣、外陣、ホールと分かれており、更に列柱に
より、分けられた中央と両袖の空間で、空間の用途が変わる。内陣では、中央に須弥壇、両袖に位牌棚、外陣では両袖に単を置く計画である。

本計画の条件においては、デザイン性、構造体の安定性、経済性の観点から鉄筋コンクリートによる柱や梁で建物を支えるラーメン構造を最良の構造体と考え、計画を進める事となった。バシリカ型の空間要素をヒントに、鉄筋コンクリートの柱が空間を分け隔てる結界柱のような役割となるように、柱の配置を行い、空間を与えていった。

天井面に関しては、柱に支えられたコンクリートの山型の梁を連続的に見せ、天井スラブのコンクリートを打ち放しの仕上げとし、力強さとその精神を表現した。

また、空間の意味合いに基づき、開口部の計画をした。内陣には、印象的な光を取り込むため、須弥壇スペース天井にトップライトを設け、自然光を取り込むことにした。外陣は、坐禅に集中するための空間として、静寂の間と位置づけ、敢えて光を取り込まないよう計画した。さらにまた、参拝者が日常的に快適に利用して頂くためにも、特に通風を意識して窓の配置を行った。窓の形状は、縦長に統一し、スリット状の光を取り込んだ。

全体的なコンセプトとして「シンプルな構造体」、「意匠になる構造体」を目指した結果、間仕切りや仕上げ材に頼らない、鉄筋コンクリートラーメン構造による室内外コンクリート打ち放し仕上げの「石と光」の本堂となった。

内観（ホールより内陣方向を見る）

内観（内陣よりホール方向を見る）

② 法輪

キリストが十字架で象徴されることはよく知られている。教会建築においても上空より見て十字架の形に建てられるようになった。

> キリストが磔にされた十字架が建物表現として表れる。内陣（聖壇）は頭部、身廊＋側廊は身体、袖廊は腕に喩えられた。光はキリストに喩えられる。
>
> 「わたし（キリスト）は世の光である」
>
> I am the light of the world.
>
> （「ヨハネによる福音書」八章十二節）
>
> キリストの身体である教会堂に光を入れる構成が追求された。[91]

十字架を模って建物が表現されるようになったのである。また、光を取り入れることも建築的にも宗教的にも重要であるが、キリスト教教会において、特にゴシック建築では、「バラ窓」が多く見られる。これはバラが聖母マリアを象徴する花と考えられたからである。

さて、養国寺の正面には丸窓を設けた。丸窓には、バラ窓も含まれるが、イスラム建築にみられるオクルス、仏教寺院でも、例えば明月院や源光庵に丸窓が見いだされるように、多くの宗教に見いだされる意匠である。養国寺も丸窓を設けたが、その中に法輪を設けた。法輪とは、

> 輪はインド古代の武器。仏の教えが他に転じて伝わるのを輪にたとえたもの。真理の輪。真実の教え。仏および仏教の象徴。[92]

という意味である。まだ仏像が造られていない時代には仏陀の象徴として、法

輪が描かれたこともある。仏教の象徴である法輪を正面の丸窓に飾ることによって、ここが確かに仏教寺院であることを周知させることができるのである。

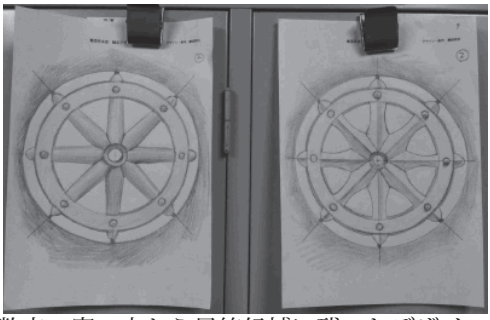
それでは、法輪制作にあたり、デザインの選定について述べてみる。本堂正面外観は、教会建築の丸窓、アーチの開口をモチーフとしたデザインであり。教会建築の丸窓は、ステンドグラスの入ったものが多く見られるが、本計画では、仏教の象徴である法輪を飾るデザインとした。また、法輪のデザインは、養国寺檀家である大友猛司氏の親戚である鍛金作家の藤田政利氏（多摩美術大学非常勤講師）[93] が務める事となった。

藤田氏による水彩画による数点の提案を受け、住職を始め、弊社現場関係者含めた意見交換によりデザインを選定していった。藤田氏によるデザインは、法輪の今までのデザインを、養国寺本堂のデザインに合わせ、装飾を最低限に抑えたシンプルなデザインがテーマとなった。

大法輪の決定案のデザインのポイントに関して藤田氏は次のようにいう。

> 八方の槍の硬いイメージを和らげるデザインにし（具体的には八方の峰の角をＲ曲線にしてやさしい感じに）、平面の面もたたいて曲面を見せるように工夫しました。その事は私の日頃の作品でも大事にしている事で金属を使いながら『軽く・柔らかく・温かく』を作品とポリシーにしている事と共通なイメージです。

法輪制作には、銅板２mm 厚を使用し、鍛金加工の後、表面を荒し鎚で荒し加工し、金メッキ仕上げを行った。まさしく、本堂のコンセプトに相応しいシンプルさと養国寺のシンボルとなる力強さを兼ね備えた法輪が檀信徒の心の拠所になって頂ければと思って作成された。



数点の案の中から最終候補に残ったデザイン

養国寺法輪

③屋根の高さ

養国寺本堂新築に際し、上記のようにキリスト教会、特に、シトー会修道院を模範としながら、新たな文化、デザインを摸索した。シンプルさなどは共通するが、相違点もある。その一つが、屋根の勾配である。キリスト教会は、地域において目立たなければならないということからか、或いは神の崇高さ・偉大さを表現するためか、上に上にという姿勢の教会建築を作り出した。

> ピュージンの主張するところによれば、塔は教会に絶対に必要不可欠な存在であった。というのも塔は、教会がコミュニティとの関係において果たすべき機能をもっとも効果的に果たしてしるからである。教会というのはそこに集う人たちによってそこで営まれる礼拝のための空間であるが、同時にまだ教会に足を踏み入れたことのない地域コミュニティの人々に対して、ここに教会があるということを表すのに非常に重要な、そしてきわめて明確な役割を負っている。(94)

ピュージンは教会の塔の機能を灯台になぞらえており、快適な礼拝施設が整っていても、伝道の対象である新来者がその場に辿りつくことができなかったならば意味がないと考えていた。

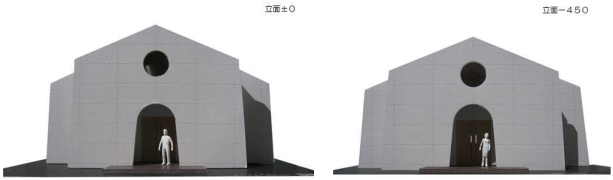
これに対して、養国寺本堂は、高さの強調ではなく、奈良のお寺の緩い勾配の屋根に見られる柔らい表現を求めた。その他の理由として、高層マンションが林立する都市部では、少しばかりの高さを求めても建物は目立

たない。あえて、平屋で低いことにより、彼所に仏教寺院があることを知らしめられると思うからである。

具体的には、養国寺本堂の建物高さは 6.55 m、本堂正面側立面前方の高さが 6.10 m、屋根の勾配は四寸勾配となる。本堂正面に見える立面外壁を二枚構成とし、本堂の顔となる前方の外壁高さを上記のように高さを変えている。外壁を二枚構成とすることで、本堂における必要間口、必要高さ寸法に左右されることなく、本堂正面のプロポーションを検討する事が出来た。

本計画では教会建築をモチーフにしながらも、日本の寺院建築として、日本的なプロポーションを維持したいと考え、本堂正面側立面の高さに関して比較検討を行った。

建物正面デザイン



また、コンクリート打ち放しの外壁の高さの決定には、躯体打設時の型枠に使用されるパネルの大きさを意識した。今回使用したパネルの大きさは一枚、900mm × 1800mm である。パネル間のジョイント部分のラインが外壁の意匠に現れてくるので、割付を考慮した高さの検討を行った。

パネルの割付を始め、コンクリート打ち放し仕上げでは、コンクリート打設時の気候や打設計画の善し悪し等、様々な施工上の要因が意匠として現れる。型枠の P コンもその一つである。壁面に整列して現れる丸い窪みが P コンである。

P コンとは、コンクリートを流し込むための型枠を構成するパネル間を繋ぎ合わせる金具の痕跡である。コンクリートが固まった後に型枠を取り外すが、そのとき出来た穴が P コンである。

この P コンの割付も建物の表情に重要な影響を及ぼす。意匠上と施工

上では、必要な位置・数が異なる事がある。一般的には、一枚のパネルに8個を用いることが多いが、養国寺では、シンプルな表情を追求し、6個の割付としている。少ない分、型枠にかかる負担が大きいため、型枠大工との綿密な計画が必要となる。

コンクリートの打設時の状況もコンクリートの表情に現れる。コンクリートは流し込むと一定の時間で固まっていくので、しっかりと打設計画を立て、効率良く型枠に流し込んでいかないと、途中で固まってしまい、仕上がりはもちろん構造的にも不足した物となってしまう。コンクリートを流し込む前には必ず型枠の清掃を行う。何故なら、型枠に入り込んだ落ち葉や埃が仕上げに影響してしまうからである。

そして、型枠にコンクリートを順番に流し込んでいく過程でも、型枠が直ぐ様コンクリートで汚れていく。コンクリートが既に入った箇所は良いが、これから流し込もうとする箇所の型枠に、施工過程で飛び散ったコンクリートの塊がこびりついていると、それも仕上げ面に異質な表情として現れてきてしまう。養国寺の天井面の打設時には、コンクリートを流し込む傍ら、天井面の型枠を綺麗な状態に保つよう、現場員一同、雑巾を持って清掃を続けた。

コンクリート打ち放しは、関係者一人一人の意識や努力の積み重ねがそのままの形で表情として現れ、人の手によって作られた世界でただ一つのものとなる。その施工における精神は、「禅の心」に繋がるものがあるのではないかと思う。

本堂正面側立面の構成

④単の設置

道元禅師は、『随聞記』に次の様に示している。

> 示云、学道の最要は、坐禅、是、第一也。大宋の人、多く得道する事、皆、坐禅の力也。一問不通にて、無才愚癡の人も、坐禅を専らにすれば、多年の久学、聡明の人にも勝れて出来する。然ば、学人、祇管打坐して、他を管ずることなかれ。仏祖の道は、只、坐禅也。他事に順ずべからず。(95)

坐禅が最も重要であり、得道することは坐禅の力によってであると説かれている。

曹洞宗は坐禅を標榜するが、浄土真宗などの「南無阿弥陀仏」の称名念仏、日蓮宗などの「南無妙法蓮華経」の題目を唱えることと違い、難行のイメージがあるためか、修行道場以外では活発に行われていないのが実情である。

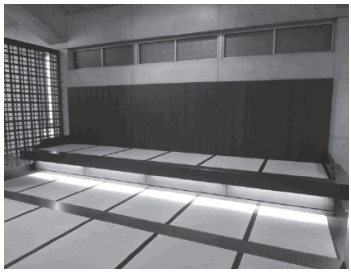
一般寺院の中でも、坐禅会が行われている場合もあるが、坐禅堂があることはほとんどないから、本堂において坐禅を行っている。そこで、養国寺本堂新築にあたり、本堂に単を設けようと考えた。つまり、本堂に単を設ければ気軽に坐禅ができるし、それにより坐禅の布教につながるのではないかと考えたからである。

単の高さは低めにした。(96) 何故なら、本堂での法要において椅子としての使用を考えたからである。また、本堂における殿鐘を、坐禅の止静、放禅鐘などの鐘として併用することにした。

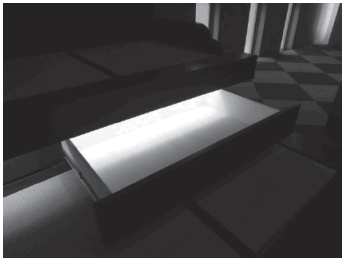
具体的には、単の高さは床面より480mm、壁面までの奥行が1100ｍｍ、畳一枚を一人のスペースとし、大きさ900mm × 900mmの畳を6枚並べている。坐禅を行う際、正面となる壁面には、板張り（樹種：ウェンジ）を施した。単の足元には、床面を照らすように照明を仕込み、床面からの浮遊感を表した。

また単の足元は抽斗となっており、坐禅時の座布団等の収納場所となっている。また、正面壁面上部には換気用のパネル式の窓が設けられているが、あえて、外部からの光を遮り、坐禅スペースを「静寂の間」として、意味付けた。坐禅に集中できる「重さ」と気軽にという「軽さ」のバランスを考慮したしつらえを追求した。

単（外陣より）



単（ホールより）



抽　斗

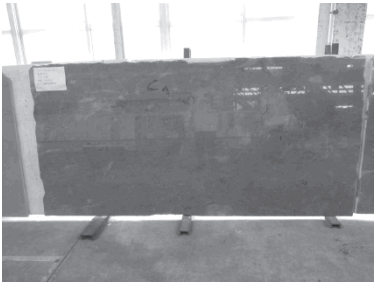
⑤須弥壇

須弥壇は大別して和様と唐様の形態がある。和様は平安時代の建築様式に多くみられるものであり、唐様は鎌倉時代に中国より伝わった建築様式にならったものである。禅宗様式ともいうが、室町時代以後、浄土宗、日蓮宗の寺院にも多くみられ、禅宗専用とは限らない。円覚寺舎利殿の須弥壇は唐様、中尊寺金色堂の須弥壇は和様として代表的なものとして知られている。

和様、唐様と種類はあるが、多くは木製で造られている。しかし、養国寺本堂はコンクリート打ち放しであるので、木製よりも石造が合うと考えた。これは、キリスト教会における聖餐台とも共通するものである。

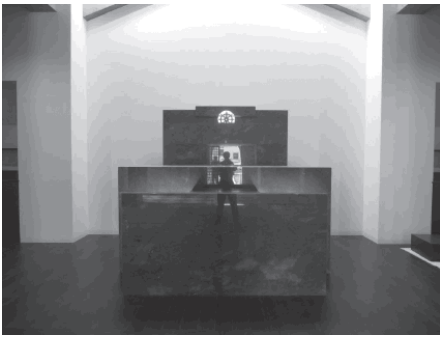
七世紀以来、聖餐台はすべて石で造られるべきものと考えられてきた。(97) 具体的には、コンクリートの空間に相応しい、従来の様式に捉われない須弥壇のデザインを追求した。シンプルな空間構成の中で、須弥壇のデザインは、本堂の要となる。材質はコンクリートの質感に負けない物を選択し

たいと考え、大理石を用いる事にした。養国寺内陣に最適な大理石を求め、最終的に、コンクリートの色と同系統の無彩色系の大理石の中からフランス産のパロマを採用した。



大理石「パロマ」検品時撮影

須弥壇の形態に関しては、従来様式の前机を使用する方針が既に決まっていたため、デザインの性格が異なる両者が共存できるようなデザインが求められた。須弥壇の形態を建物と同じく二枚の壁面構成とし、前机の異なる性格のデザインが混じり合わないように、前方の壁面により前机のデザインを緩衝させている。二枚の壁面の間には、須弥壇へ登る階段スペースとしている。また、トップライトから降り注ぐ自然光の中に坐る本尊釈迦牟尼仏の姿を意識した。全体として、自然石の石板を積み上げたような構成としている。



須弥壇（正面より）

須弥壇（側方向より）

⑥内陣

自然光を採り入れながら独自の世界を作り出す教会建築の手法をモチーフに、須弥壇の上から降り注ぐトップライトの光をはじめ、自然光のデザインを意識した。参拝者にとっての非日常空間を作り出す事を意識すると共に、採光や通風にも考慮した滞在しやすい場を目指した。

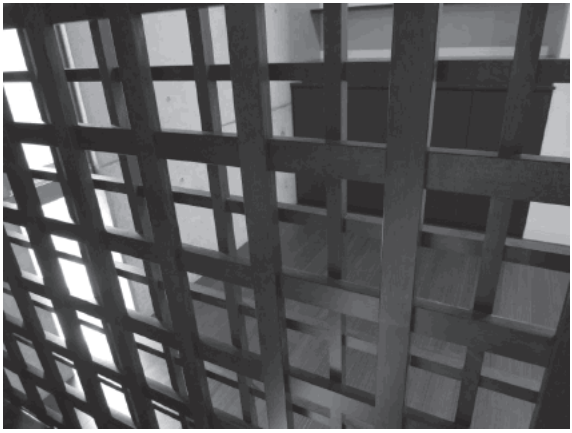
内陣と外陣の境界には両袖に格子間仕切りを設け、内陣が特別な領域である事を表現した。組子部材同士を重ねる事で、より奥行感のある格子を表現している。組むのではなく、重ねる事で、制作工程を簡略化し、コストコントロールのバランスを考慮したデザインである。

また、光による「聖性」を表現するために、トップライトを設け、自然光を内陣に取り込んだ。季節や時間によって、入り込む光の量が変化するため、異なる表情の内陣を感じることができる。また、照明に関しても、同様の目的のため、光のみを感じられるように、器具の配置を工夫した。内陣を正面とする側から見て、照明器具を隠すように、スポットライトを梁の側面に設置した。また、養国寺本堂では天井に天蓋などの装飾物を設置ぜず、照明により天井のコンクリート面を照らし出すことで、コンクリートの持つ素材感、力強さ、不変性を表現している。

既成の概念を打破する本堂、文化としての禅を追求される住職の「禅の実践」を、建築工学見地において、人の手で造形できる石であるコンクリートと仏の顕現である光によって、養国寺本堂を解釈させて頂いた。

内観（ホールより内陣方向を見る）

内陣（トップライト）



内陣（格子間仕切り）

おわりに

養国寺本堂新築にあたり、様々な経験をさせていただいた。さまざま人々との繋がり、協力、ご縁によって建物が建てられていることが改めて分かった。特に、総代長鈴木祐一氏、総代湯原直昭氏、総代清水一氏、檀信徒根岸昇治氏ご夫妻、藤田政利氏、水澤工務店の方々のご尽力は大変有り難く感じた。

また、建築は文化や宗教と密接に関わりをも感じた。饗庭孝男氏によれば、「建築とは目に見える「文化」の形態であり、思想の可視的なシステ

ムである」[98] という。様々な文化や思想の表れが建築という姿で可視化されるというのである。あるいは、ルイス・カーンは建築に関して、「建築は、大いなる超越に対する高遠な試みであって、私の知る限り最高の宗教的行為である」[99] と主張している。文化や宗教を表現する一つの手段が建築であり、建築を行ずることが一つの宗教的行為であるといえよう。瑩山禅師も寺院の造営は善事であると示しているが、善根功徳になると思う。

さて、養国寺本堂新築に際し、考えたことを縷々述べたが、それを要約再掲すれば次の通りである。

一、コンクリート造りにした理由は、第一に、火災に強く、地震に耐えるには木造よりもコンクリート造の有利であるからである。以前の本堂が戦災により焼失したので、火災対策を重視した。また、所在地が都会のビル群にあり、景観的にコンクリート造の方がより相応しいと感じたからである。さらにまた、横山秀哉氏が分類したように、様々なデザインが可能であり、現代に相応しいと感じたからである。その他、工期・費用の面も考えた。

二、「文化の発信としての禅」の発想である。中国より禅が伝わったが、それは単に宗教の伝来だけでなく文化の伝来でもあった。つまり、異国の文化が日本に流入し、広められたが、その担い手が禅寺であったのである。その意味で、禅寺は新しい文化の発信基地でもあり、現代でもこのことを生かすべきだと思う。そこで、西欧文化であるキリスト教文化を取り入れ、融合して発信してもよいのではないかと考え、ファサードをイメージした。

三、現在、キリスト教（カソリック）と禅との交流が行われている。それは両者に共通面があるからである。カソリックの中でもシトー会修道院は禁欲的であり、その意味で禅に近いと思われる。また、シトー会修道院の建築物はシンプルであり、模範とすべきと考えた。「いっさいの装飾をそぎおとした空間そのものの美」が近代建築の大事な規準とされるが、シトー会の建築はそのさきがけであった。この簡素性と無装飾の美意識は禅にも通じている。ただし、すべてがキリスト教会と同じではない。尖塔など高さをあまりにも強調するのは

ふさわしくないと思う。

四、大本山総持寺の特徴の一つである革新的な面を模範とした。能登半島から御移転、七堂伽藍の配置など、大本山永平寺とは異なる歩みもある。曹洞宗としては現在のような保守、革新の両者が必要であると筆者は個人的に感じている。

五、個々のデザイン面では、内部の構造について、法輪、屋根の高さ、単の設置、須弥壇、内陣などにシンプルかつ斬新さを求めて工夫をこらした。

以上、養国寺本堂新築にあたって、どのような意図で本堂の設計・デザインに携ったかを記した。最後に、ご多忙のところ執筆にご協力いただいた栗原悠紀氏（水澤工務店）に深く感謝する。

註

(1)『坐禅用心記』（孤峰智璨編『常済大師全集』二四六頁）。
(2) 工期は平成二四年８月一日から二五年三月三一日。工事価格は八千万円（消費税抜き）。
(3) 昭和五六年生まれ。法政大学大学院工学研究科建築工学専攻修士課程修了。現在水澤工務店設計部。一級建築士。
(4) 横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』昭和五二年、彰国社、一五頁。
(5) 横山秀哉前掲書一六頁。
(6) 横山秀哉前掲書一七頁。
(7) 横山秀哉前掲書一八頁。
(8) 横山秀哉前掲書二二頁。
(9) 横山秀哉前掲書二三頁。
(10) 横山秀哉前掲書二三頁。
(11) 横山秀哉前掲書二四頁。
(12) 横山秀哉前掲書二四―二五頁。
(13) 横山秀哉前掲書二六頁。
(14) 横山秀哉前掲書二六頁。
(15) 横山秀哉前掲書二七頁。
(16) 横山秀哉前掲書二七頁。
(17) 横山秀哉前掲書二七頁。
(18) 横山秀哉前掲書二八頁。
(19) 柳田聖山「初期禅宗と止観思想」（『止観の研究』一九七五年、岩波書店、二六二頁）。
(20) 竹貫元勝『日本禅宗史』一九八九年、大蔵出版社、四七頁。
(21) 箱崎和久「泉涌寺伽藍にみる南宋建築文化」（『アジア遊学一二二日本と《宋元》の邂逅―中世に押し寄せた新潮流―』二〇〇九年、勉誠出版、六二頁）。
(22) 原田正俊「日本の禅宗と宋・元の仏教―生活規範と仏事法会―」（『アジア遊学１２２日本と《宋元》の邂逅―中世に押し寄せた新潮流―』二〇〇九年、勉誠出版、一六頁）。

(23) 平田精耕『禅からの発想―自由自在に生きる―』昭和五七年、禅文化研究所、一四五頁。
(24) 平田精耕前掲書一四七頁。
(25) 水野弘元・柴田道賢監修『宗教学ハンドブック』昭和四四年、世界書院、二六―二七頁。
(26) 佐藤達生『図説　西洋建築の歴史―美と空間の系譜―』二〇〇五年、河出書房新社、一一二頁。
(27) 佐藤達生前掲書一一三頁。
(28) ジモーネ・コーゾック著、島田道子訳『修道院へようこそ―心の安らぎを手にするための一一章―』二〇一〇年、太洋社、三〇頁。
(29) 峰岸正典師は筆者が永平寺安居時代（昭和６３年）に永平寺の役寮をされていた。その後、峰岸師に引率されて「世界宗教者平和会議」に出席させていただいた。その研修旅行の中で南ドイツにあるベネディクト派聖オッティリエン修道院に宿泊させていただいたことは貴重な体験であり、大変感謝している。
(30) 峯岸正典「宗教共同体としての僧堂もしくは修道院」（『教化研修』第五三号、平成二一年、七九頁）。
(31) 峯岸正典「宗教的共感の源泉―東西霊性交流の場合―」（『宗教研究』八四巻四輯、二〇一一年、二〇五頁）。
(32) 峯岸正典前掲書二〇六頁。
(33) 朝倉文市『修道院にみるヨーロッパの心』一九九六年、山川出版社、五一頁。
(34) 今野国雄『修道院』一九七一年、近藤出版社、二一四頁。
(35) 今野国雄前掲書二〇七頁。
(36) 六田知弘『石と光―シトーのロマネスク聖堂―』二〇一二年。
(37) 竹内裕二「イタリア修道院の回廊空間―造形とデザインの宝庫・ロマネスク、ルネサンス、バロックの回廊空間―」二〇一一年、彩流社、一〇三頁。
(38) 今野国雄『修道院』一九七一年、近藤出版社、二二六頁。
(39) 竹内裕二「イタリア修道院の回廊空間―造形とデザインの宝庫・ロマネスク、ルネサンス、バロックの回廊空間―」二〇一一年、彩流社、九六頁。
(40) 今野国雄『修道院』一九七一年、近藤出版社、二一五頁。
(41) ジモーネ・コーゾック著、島田道子訳『修道院へようこそ―心の安らぎを手にするための一一章―』二〇一〇年、太洋社、一〇二頁。
(42)『宝慶記』（『道元禅師全集』第七巻、一九九〇、春秋社、一四頁）。
(43) レオン・プレイスイール『シトー会』二〇一二年、創元社、六四頁。
(44) 竹内裕二「イタリア修道院の回廊空間―造形とデザインの宝庫・ロマネスク、ルネサンス、バロックの回廊空間―」二〇一一年、彩流社、九七頁。
(45) 中村好文・木俣元一『フランス　ロマネスクを巡る旅』二〇〇四年、新潮社、一五〇頁。
(46) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一〇七頁。
(47) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一〇八頁。
(48) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一〇九頁。
(49) 中村好文・木俣元一『フランス　ロマネスクを巡る旅』二〇〇四年、新潮社、一五三頁。
(50) 中村好文・木俣元一前掲書一五三頁。
(51) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一〇七頁。
鈴木了二氏は、「ロマネスクとは、世界を分割し、細分化し、そして統合することを前提とする「近代」的言説から、おそらくもっとも遠いところにあるからである。あえて言えば、両極に分解する以前。または以後。あるいは両極だけを除いた全集合。限りなく引き延ばされた中間領域。いつまでも絶句し続ける接続詞」（鈴木了二「アクチュアル・ロマネスク」『中世の光と空間　フランス中南部のロマネスク建築　SD 1996 年 10 月号』一九九六年、鹿島出版会、六八頁）と述べている。ロマネスクを定義する難しさとともに、きわめて禅的なものを感じる。

(52) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一〇六頁。
ロマネスク建築の空間特性について、河辺哲雄氏は次のように八点列挙している。
1．平面形の幾何学化、単純化
2．平面形と一致した立断面計画
3．比例関係の重視
4．空間の韻律法
5．構造と表現の一致
6．計画の標準化
7．地場の素材の活用
8．表現の多様性
川辺哲雄「ロマネスク建築のつくる景観構造と空間性」『中世の光と空間　フランス中南部のロマネスク建築　SD 1996 年 10 月号』一九九六年、鹿島出版会、二三頁。
(53) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一五三頁。
(54) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一八三頁。
(55) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一八四頁。
(56) 越後島研一『ル・コルビュジエを見る』二〇〇七年、中公新書、二〇〇頁。
(57) フェルナン・ブイヨン、荒木亨訳『粗い石―ル・トロネ修道院工事監督の日記―』二〇〇一年、形文社、三一頁。
(58)『正法眼蔵随聞記』五（『道元禅師全集』第七巻、一九九〇、春秋社、一一八頁）。
(59) 六田知弘『ロマネスク　光の聖堂』二〇〇七年、淡交社、一三一頁。
(60) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一九九頁。
(61) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一九九頁。
(62) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、一九〇頁。
(63)『永平広録』第七（『道元禅師全集』第四巻、一九八八、春秋社、八二頁）。
(64) 西田雅嗣『シトー会建築のプロポーション』平成一八年、中央公論美術出版、二〇五―二〇六頁。
(65) 六田知弘『石と光―シトーのロマネスク聖堂―』二〇一二年。
(66) 川辺哲雄「ロマネスク建築のつくる景観構造と空間性」『中世の光と空間　フランス中南部のロマネスク建築　SD 1996 年 10 月号』一九九六年、鹿島出版会、二五頁。
(67) 伊吹敦『禅の歴史』二〇〇一年、法蔵館、二四頁。
(68) 饗庭孝男「「ロマネスク」―その文化的基盤」『中世の光と空間　フランス中南部のロマネスク建築　SD 1996 年 10 月号』一九九六年、鹿島出版会、九頁。
(69)『禅の風』平成二四年、曹洞宗宗務庁、一二頁
(70) 中尾良信『図解雑学　禅』二〇〇五年、ナツメ社、一四一頁。
(71) 中村元「瑩山禅師の思想史的位置づけ」（『瑩山禅師研究』昭和四九年、瑩山禅師奉讃刊行会、三六頁）。
(72) 中村元前掲書三七頁。
(73) 中村元前掲書三九頁。
(74) 中村元氏は瑩山禅師とクリュニー修道院とを対比されているが、この比較の中でシトー会修道院の位置づけをも考えなくてはならないと筆者は考えている。
(75) 筆者個人も、本師は永平寺系、法幢師は總持寺系であり、安居は永平寺、現在の職場は總持寺内（平成二五年現在）と二つの系統の中で生かされている自己を感じる。

(76) 總持寺系は『伝光録』に見られるような道元禅師の悟り（身心脱落話）を認めるが、永平寺系はそれを認めない系統であると現在の筆者は個人的に考えている。そして、両者の葛藤が重要であると思う。あたかも、看話禅と黙照禅との如くに。身心脱落に関しては、拙稿「身心脱落の一視点（上）―身心脱落の時期について―」（『曹洞宗宗学研究所紀要』第十二号、一九九八年）、拙稿「身心脱落の一視点（下）―身心脱落の意味について―」（『宗学研究紀要』第一三号、二〇〇〇年）参照。
(77) 横井秀哉『禅の建築』昭和四二年、彰国社、一六八頁。
(78) 横井秀哉『禅の建築』昭和四二年、彰国社、一七三頁。
(79) 横山秀哉「總持寺の伽藍建築」（『宗教工芸』第一巻四号、一九七九年一〇月、三七頁）。
(80) 杉野丞「曹洞宗寺院の建築と瑞龍寺」（『〈国宝〉高岡山瑞龍寺』一九九九年、北日本新聞社、八三頁）。
(81) 横山秀哉「總持寺の伽藍建築」（『宗教工芸』第一巻四号、一九七九年一〇月、三九頁）。
(82) 横山秀哉「瑩山禅師の開創寺院について」（『瑩山禅師研究』昭和四九年、瑩山禅師奉讃刊行会、四五四頁）。
(83) 横山秀哉「瑩山禅師の開創寺院について」（『瑩山禅師研究』昭和四九年、瑩山禅師奉讃刊行会、四五五頁）。
(84) 横山秀哉「瑩山禅師の開創寺院について」（『瑩山禅師研究』昭和四九年、瑩山禅師奉讃刊行会、四四七頁）。
(85) 横山秀哉「總持寺の伽藍建築」（『宗教工芸』第一巻四号、一九七九年一〇月、三九頁）。
(86) 岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』一九九一年、岩波書店、八三頁。当該箇所に関して同書には岡本良知『南蛮屏風考』の以下の解説文を示している。
わが国の寺院建築は九間四面、七間四面、五間四面等の比率で、間口に対して奥行が短い。ヨーロッパの教会建築は、間口に比べて奥行きが深い。ヴァリニャーノは、日本で教会堂を建てる場合の心得として、他の建物は日本風に建築すべきであるが、「天主堂はわがヨーロッパの慣例を保存するように造られ、礼拝堂は長くして、日本人がその寺院を造るに慣わしとするような横幅があってはならない。
(87) 藤森照信『建築史的モンダイ』筑摩書房、二〇〇八年、六五頁。
(88) 藤森照信前掲書六六頁。
(89) 藤森照信前掲書六八頁。
(90) 藤森照信前掲書七二頁。
(91) 安原盛彦『西洋建築空間史―西洋の壁面構成―』二〇〇七、鹿島出版会、四一頁。
(92) 中村元『佛教語大辞典』昭和五六年、東京書籍、一二三九頁。
(93) 一九五二年東京生まれ、一九七七年東京藝術大学美術学部工芸科卒業、一九七九年東京藝術大学大学院美術研究科鍛金専攻修了。
(94) 近藤存志『現代教会建築の魅力―人はどう教会を建てるか―』二〇〇八年、教文館、二一頁。
(95)『正法眼蔵随聞記』六（『道元禅師全集』巻七、一九九〇、春秋社、一四九頁）。
(96) 単の高さは、横山秀哉氏の実測によれば、東福寺１．８７尺、永平寺１．７６尺、總持寺１．５８尺、興聖寺１．７７尺である（横井秀哉『禅の建築』昭和四二年、彰国社、一八六頁）。すなわち、永平寺は約５３センチ、總持寺は四八センチである。単の高さに関しては、「単の高さは古規に一尺六寸とある。その根拠は僧祇律が牀脚を作るに高さは修伽陀の八指とは佛の八指。佛指の闊を二寸とされるので八指を一尺六寸と計算したものである。養国寺の単の高さは仏制に合致する。
(97) 近藤存志『現代教会建築の魅力―人はどう教会を建てるか―』二〇〇八年、教文館、三七頁。
(98) 饗庭孝男「「ロマネスク」―その文化的基盤」（『中世の光と空間　フランス中南部のロマネスク建築　SD 1996 年 10 月号』一九九六年、鹿島出版会、六頁）。
(99)『ルイス・カーン建築論集』SD 選書参照。